明史巡嶋記

第上編

卷五

叢

書庫

番號 168

冊數 40

105

56

169

へ13

3093

30

吉田屋

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五

東都　曲亭主人編輯

後輯第五十七

節義の守戸浦
損益の元鳥塚

光仲の夢物がたりふ人々駭ぬ且感じぬる。そゞ中ふ義邦ハ且見姫の送せし歌を。
ゝり逸しつゝも嗟しと後悔嗟嘆ふ勝ざりけん光仲かうも對ひて絆のことを
推もと死ハ某ゞ愁ふ藁二郎を八田の莊へ遣しゝりける故ありしかき
るもしつるゝ和といふを光仲ぞ。いつぞうハさることあるんか袋坂の窮地ふ
交遊の義を忘れ給ひで彼男をもそ守直ふゞ資とせゝれしあるゝ見親切
他人の及ぶ所ふあらぬ。ゝ慮ひ足らぬしそゞ妻ふ頭髪を剪うせ刺
忠信節義の藁二郎桜枝ふ非命ふ殺せし錯誤ハみゝ某ゞ方寸ハ

吉田屋

門へ13
3093
30

惑ひより出でうとい[illegible]も面[illegible]を守直もさぞ恨みけん。あく[illegible]高吉等ぶ[illegible]程も影護[illegible]との[illegible]人食尉め慰め難く齊一嘆息をそゝりける登時義秀勝を進めて藏人さの[illegible]歎[illegible]四時を行ふ天地ゆも寒暑不順の差舛あり。聖賢も亦然あり。誰ゝ衍[illegible]慾[illegible]改[illegible]

婦人ハ胷の廣[illegible]ハ寃屈の怨より身を措[illegible]て早[illegible]く頭髻を剪られ[illegible]ども尚祝髮ふ及ばぬ。相計ふ術もあ[illegible]ぞやハそこ[illegible]ハ某ふ。ふ[illegible]も任[illegible]へ[illegible]抑且見姫の一條ハ前日小壺の浦邊ゆく某これを[illegible]ども告る[illegible]暇あり[illegible]ふ和殿の夢想ハいよ[illegible]く奇[illegible]て且精細の[illegible]を[illegible]ハ菌様々と浦太郎が夏の趣首より尾りまで言送もあ[illegible]く說示せバ光仲義邦[illegible]ハ[illegible]高利廣光高吉ふ城戸水草馬養の青年輩まで[illegible]べく兄弟夫婦

一對の彼誠心を感じる。次の間より人ありてよとばりふ泣沈む老女の声ぞ[illegible]ける。當下義邦ハ廣光ふをえ[illegible]く彼藁二郎ふ異父の兄あるあ[illegible]ハ小袋坂の危窟の折ふ[illegible]ども。その嫂と共伯ふ黄泉の客とあ[illegible]

[illegible]ひ[illegible]ぬ[illegible]然ハ[illegible]死[illegible]るあ[illegible]ハ惜めど返るべくもあ[illegible]

かの兄ある浦太郎と称ふあ[illegible]。朝夷ぬ[illegible]ふ値偶せ[illegible]も亦一奇夏[illegible]

とゝへバ廣光さゝ[illegible]浦太郎ハその霄より[illegible]の御館ふ[illegible]ハ朝夷ぬふ請ま[illegible]ん御對面あれ[illegible]とゝふを義秀側より[illegible]件の男を諸君子の見參ふ入ま[illegible]ん[illegible]。

[illegible]浦太郎ハ那里ゆ[illegible]る近く進ゆと呼立れバ緣頰の盡処ある寶戸の蔭より心ゆる声隱らせ[illegible]浦太郎ハ光仲の夢物[illegible]を洩ぜ[illegible]より[illegible]塞[illegible]たゆ[illegible]る涙の雨の袖ふ漏てもあ[illegible]ふ憂ゆハ漏れぬ莫[illegible]

圓坐の席の末ふ數ゐ〻ぬ身のゆ〻しあく列さへ現一樹の蔭他生の縁と縁
頼ふ進るも入らぬ額つけば義秀うもうもうく浦太郎是首より彼首へ返るうねば
諸君子のいれーるも多田氏の霊夢のすもよく〻ゆえるあーん。あも蒹二郎が
故主ある吉見殿であの方さゐ八校枝ゞ主ある多田殿ありとひとりく〻告あるまれば
義邦ゆをう進こよりて。ゆよ浦太郎狀をゆあひぬ幾遍ゆをも返ぬゆをいよい
無益ふ似られども死して霊ある蒹二郎校枝ゞ忠義八今ゆ〻ふ感もるふ八ゆあり
ありそれも劣らぬ汝ゞ誠心貴賤その差ありとゆふとも親の心をゆひ汲て弟ふ
家を嗣せんゐふ逐電せーゆ呉の太伯の志ふ似りとゆい半只この一ト條のこ
ゆゑ。婦翁の慈を復さん為ゆ飽ぬ夫婦の別れをーつ活業をゆもんく〻ぞ。
多年心を竭せと狀天感空ーうねばぞ。朝夷ゆーふ値遇せーゆ獲ゞ九
両隻の鰐を刺うふ。みゆ同日の美談ゆれ是をゆひ彼を受ば蒹二郎は

あふ心地そゆる本意ふ惬ゆ一對面ゆ紀ゆふ高利廣光高吉みゆ進こ出
若告をーつ只曾誉て已ざりゆを且くしと浦太郎八額つけゆる頭を擡過世ゆり
てゆこの年来あん愛顧を稟ゆりーー蒹二郎ゞ兄ありて大人君子の恭く
あん目をゆるのこゆゆそいと懇ふ慰めゆふを辛ひとゆをゆふ及べき文辛ゆーとゆ
もう及べ紀ゆの歓びふ就て亦ゆ哀こゆ一ト〻まぬそゆ蒹二郎校枝ゞ身後の
忠義の徒首ふ洩ゆえ〻れゆこいと愚ゆる心ゆそ使りく見ひへば大約貴紀と
賤ゆ夫婦の情義八不易ふ。と始ゆり終ゆり。ゆーー始ゆり終ゆくハゆふ良
善の君子こいふとゆ徳ふ酬うる所ゆりゆそいと憚ゆるこゆ。ゆこハのあん義の平梁ゆ田の
殿の光伊ゆ。あん疑の解こゆ世ゆ。ゆゆゆゆゆゆ姫ゆ人を召ゆこゆ世ゆ。ゆこと紀ハ主殺ゞ
今生後世の雲霧ゆく天津月日をゆこるゆーゆり只願ーゆ紀ハこのゆゆこいふ
俟さーゆこゆる誠ハゆこゆくゆれゆ光仲これをゆもゆゆく躬ふ勝推向

浦太郎あるこへ進められを藏人光仲れ嚮ふ名告をもべうりしをのの
ざるもしハ汝が為ふ酒うく差る故ぞうかるふ心の誠を演くいれし趣愚意ふ
稱へり光仲も亦木石あらねバ越ふ夫婦の再會を欲せざるこあらねどもこの
る光難義あり且見ハ早まて頭髻を剪ぬ召ぶとも輙く帰るべくもあらず
ひへば光仲ゞ身の非を餞るふ似れども彼飯酢の一條ハ某ふ誅られる
守戸をよく知られとゝひて後方をもん之をもを義秀をもくあるゝ守戸もある
とゝ立れバ先の程より紙門のあれるふ位沈さる守戸の高い志をしふく綸を記もて
おるゝ進を入るを義秀義邦粧を被て面も間近く侍せり登時守戸ハ
眼包ふ残る涙を袖ふ拭へども雲時頭を擡げもう屋くゝて光仲美秀
義邦等ふ對ひてふ曩ふ曩ふ拔技ゞ縁しふ連て武藏あり寄せ申ひぬる
姫うへのあん消息をみもうふ取徙あるゝせ。そのゝ忽地寃とゝるる情由ハ

先より殿ゞこのあん物うるうふ驚紀侍りぬあを諄言ふ似られどもかの折武
藏の姫うへより贈らせ申ひ。磁器ふ異ありとも絶て侍知らぬその詰見ふ麈ふ
一隻の烏の死ゝるをこんてあるうもはゞ侍りしを今侍ゝ見バ太田の殿のあ物ゝふ
吻合して毛骨も竦侍り死れハ殿のあん疑ひい寔ふ然るべ記もゆゝを
そ之恵ハ矩を踰捉を犯して姫うへのあん消息を取徙るゝ。
侍るゝ。あるゝ夫ゝと御灵夢のゝ云云と姫うへふ具ふ告させ申ハ沖髮を
剪らせ申ふとも躭ゝく帰らせ申ふぞやとゝひて後方をゝ久ゝて南浦太
とのゝふまゝるゝ拔技ゞ自殺あゞ對面ハせざりゝうゝもあんゝの舎弟
藁二どのゝ忠魂義膽微りせゞいふて姫うへのあん孺衣を乾せよ。あん
齢四十ふ及ぶまゝ子のあをゝうゝ女児ともゝひゝ姪を先ゞてゝる悲ゝゝハ
屑ふも侍ゝゝあん身ハ舎弟ふ立代をゝるゝを拔技ふ為りゝ代ゝゝく姫うへ

御夫婦再會のおん使ごもせばりせば草の原なる妃人ふ在ふ入ゆ一と云
ふんおん身ハ何と云ふぞや。と問れて勇む浦太郎ハ頻ふ勝の進むを覺ぜそ
某も願ふ所なり。君を先ハ身を先。この議ふよ〳〵成就せば弟と妻ハ千僧の
讀經ふ優さ佛果を得んあるべし郎君吉見の殿ぞ。おん對を添させ給ひて
彼姫この人の帰らせ給へ。おん相討をあるまほしく名れ御慈悲々々と彼此へ願
つく姫夫妻の殘切なる願ひ深妃海の名ふ守ふ浦ふ船渡りなる歎ふ云
人食道理ふ逼られて感涙の外なるけりそ中ふ義秀ハ勝ふ拍ふ声高ふ
通微妙妃願ひ。これも亦件のすを笑ふ日ふ藏人夫婦の為ふ肝膽を
摧くこのこの議輙く整ひ妃情由ハ只今夏生のべられし如ふ歎美あり
且見姫ふ先ふより尼ふなるべ妃情願あり。を駿河前司の許ふて藏人ふ
妻せさりと偽ふ〳〵を思ひ合して今その意中を推量ふ藁二郎ふ灵ふ

扨ハ立夢ふ入りて寃屈のよりを諦せ〳〵良人の魂ひ解さうと報ふ〳〵敬ふ
べし然とて頭髪を剪さるまふ阿容々々として帰らんや前非を悔て丈ふ伏しる
藁二拔枝ふ身後の義列を偽へ〳〵ふ集を〳〵も憐むべき孫增て出家の願ひ
決定せん又藏人も如右ぞ〳〵人の為ふ謀られ〳〵身れ恥を知るとはいへども男女尊
卑の差別あり今〳〵を揚り腰を折りて賠話つく妻ふ帰れといふ対と憂と
処を易さく倒ふ懸るふ如〳〵首鼠両端ふ決めうひて煩ふ故〳〵ありれども
彼達ふ弟と姪ふ代らんと願ふハ則あるべの誠産靈も感應あるべ不測の功を立
ものせんこれ〳〵この義を父ふ請さく守戸ふ身の暇を取せん浦太郎ものべ兵ふ伊
豆の愛玉ふ赴ふくよ〳〵を告て姫ふ仕へよ藏人もこの便りふ就く言告やるべ
よりもおんなをでめいのを出家を禁め折を窺ひ時宜ふよりく叔藁二郎
梭枝ふ灵の寃屈を諦せ〳〵夏の趣藏人も亦後悔の言云云と報知せて間中

隼人と相談ぞその間ふ且見姫の思ひ屈る心の迷ひも頭髻も伸く事ぞ成らんかくせよと説示せば浦太郎ハ守戸と共ふ一議ふ及ばぎまらく勇こく御教諭うけぞり生りぬ明暁発足仕らんとのみ歓ぶ下河邊高吉も赤進こく朝夷大人の名ん計ひハ一言隻句も皆千金やとく感服仕り即就て守戸浦太郎ふハ桜枝ぞ名ん叔母ふ一く藁二郎ぞ兄とのみも姫ぞ認りぬ疑ハこと事ぞ無し其も亦共侶ふ彼地ふ赴ぶ者ぞ便りよく一そのいめとのみが高利義邦主従ぞの浅寔ふ為ぞ藏人四郎ハ一つぞ

と問れて光仲貌を改め天肖の某かく表ふ諸君の群議を労まること。あれ莫大の幸ひこいぞう推辞必ず且見姫ハ母ぞ妻ぞ駿河前司の愛女ゆて鎌倉殿の宗族こう某ハ素刑餘の賤隷婦翁ふ代りて征東の大任をのみとハ。そ一炊の栄華ゆく今ハ浮浪の窮士こう且見ふ些の慰ありとも前司殿の恩義をあらぐ去らるべ妃妻ぞあらぐ況く那時飯酢の縁の真偽を考糾さで怒りく歌を贈りハ短慮ふ生く今更ふ後悔胸を噬の外ゆ然るを僅ふ歓ぶべ妃ハ曩ふ桜枝藁二郎ぞ忠告の霊魂ぞ今ハ守戸と浦太郎ぞ使を望む媒妁ぞ有かく人ぞ光仲ぞ色ふ愛情ふ惹れく妻ふ逢んと楽ぞ有あらぐ妹伏の縁しを結んとも又結ぶとも太田ハ且見ぞ荘園ぞ彼處ふ入りて後見せぞ入れあれぞそ世をぞ捨て往方もぞ知せもぞ有ぬひく前司殿の恩義ふ負くこう悲ハ有こまり小三郎もこの意を悟く守戸浦太ぞ案内をせよ伊豆へ遣を物こそあれとのみく短刀引抜く頭髻を弗と剪とりつ刃を収めて更ふ又墨斗の筆を抜出ぞ且見姫の袱の裏ふ　まづこの名を記る濡衣ハおまとぞ妃祥ぞありけると書れる件の歌ふ推並べく。後の世をかけくもをひ

黒髪の紊れのそゝをとられやとゝまり書とゞめ讀くゝて両隻の頭髻を推包む紙の端をもたゝく結びていざとて守戸浦太郎がもとりふさぎ
よびれがあをそもろふとだろふ人衆駭嘆せざるもなく呆れく目とまを指るのゝあと向べくもあゝぶまじ義秀ひとり世も驚ぶ左右をつゝく
えゝうく諸君子何とうんあひこと夫婦の離別ふ世をそうあゝく髪を剪る藏人かんや先ゝこの意を猜しゝへといられて驚く光仲ハふる招れて
推禁め朝夷めしの賢察いこの席の外漏もべゝうゝ某既ふ世ふ捨られても憖命のあゝん限りハあ横難を怕るのゝかれが浮世ふ望ゆゝ
示ゝ羅髪の體い嫌忌を避ん為ふ科ゝ且見を誣ゝうゝをの怨ゝも慰る報ひをゝふ包ゝうゝ曩ふ廷尉義盛を預けまゝりゝ弓箭を取よゝ
ゆゝひゝとゝあふ義秀掌鳴しゝて童髫徒を招よゝ綽云云と分れがゝゝ

ふ果ゝく退出て且くしゝて來る弓箭を光仲ゝ受とゝうゝ藏ゝ
左右ふつゝゝ立下何邊小三郎近く進ゝて兼まゝあれい見家の重宝雷上動
透羽彫羽の弓箭ゝ頼政卿より相兼ゝて仲綱ゝれを駿河守廣綱ゝ仕ゝ
ゝ介るふ経任征伐の折不肖の某借用ゝて國賊を討夷げゝも皆ゝこの弓
箭の德すゝく靈応灼然ゝうゝハ世の人もゝく知まり光仲既ふ黙られく
道人ゝかんゝゝふ笛置くべゝゝのふゝゝゝかれゝば仲綱の御子孫ふ讓ゝんと
ゝゝゝ召竜ゝれゝゝの日より廷尉ゝ預措ゝゝゝ仲綱のゝん子許ゝあり
嫡男肥後守宗綱ゝゝハ治承四年の戦ひふ屯道ゝく自殺ゝ次男
左衛門尉有綱ゝゝハ治承四年六月十九日伊賀國名張ふく平時忠ふ
撃れゝゝゝ三男田代冠者頼成ハ今ゝふ鎌倉ふ在りとゝへども業利の為ふ
恥ゝふゝで傾城局の別當を奉ゝゝゝゝ人ゝれが頼げゝゝぞ四男廷尉成綱ハ

朝ひる
間中隼人
浦太郎
光仲
下部ハ三ツ

既ふる世を逝あひぬ五男ハ廣綱朝臣ゆく實ハ仲綱の養嗣なり男
判官代頼季も近屬物故のさえあり。さて〳〵のうへハ高吉も蒙てよりよく
知りつゝんぬとう伊豆守公綱ぬしハ宗綱のあん子ゆく仲綱朝臣の嫡男なり
弓箭を取て父祖ふ劣らぬ大内の守護どゝく年来在京ゆへ八ものこの弓
箭を公綱ぬしふ讓らんとおもへ和殿伊豆ふ赴ぬく且見姫ゆもこれらのこゝを
告ゝく華洛ふ走登り公綱ぬしふ偖へよう〳〵彼人ゆこゝ去の後の住ひを甚歎
問れば。そひ入る深山の牡鹿支とせんゆ弓箭を捨〳〵身ゆをやもけること
なりとふてそへ。と答へより。と叮嚀ふ示し〳〵弓箭を遮与ゆふん高吉ハその
ものの理りあれば推辞りゆ応りゆてゆ畏るこれを見彼をゆひゞむ。義邦主従
高利ふ守戸浦太郎の傳あゞ刃ふ走りくと水枯の杜ゆ〳〵なくふ慰ゆ言の
葉も多く深ぬ夜の席上ゆとゞ蕭介之光仲左右をえゝへうて喃諸君子

かうゆゆく愛惜の述懐ふ似られもむりゆ外ふ聞せ〳〵書の彼部鄭の桑
一炊もゆへ八今のこゝろ人ゆり除目補任の目覚ぬ枕安南柯の一夢ふ過ぎ
かゝもゆへけふゆり道歸を抗中齋とのゆへぬのこゝをゆ〳〵ぬやとゆも笑へば
義秀も亦含笑ゆく光仲入道抗中齋ゆ相応〳〵ぬ佳婦ゆ〳〵彼沈氏
既濟をゆ〳〵世ふ在〳〵ぬ八壁署を書ん枕とゆへ八既ふ寝よとの鐘も
響ゆく浦太郎守戸ふゆとく退ぬく起行の准備をせゞゆとゆゆ〳〵八
高吉も亦共侶ふとく齊一立んとゆる程ふ次の間ふ人むりゆく〳〵ゆ使ゆ
と呼禁めゆく猛ふ進ゆ入るゆめをとゆれば是別人ゆ〳〵間中華入寺直
ありゆひゆけるゆれば〳〵ゆふとゆゆりふ衆皆驚ぬ且怪ゆゆ只
つゆくとゆも目成ゆ八守直ゆゆをとゆと合笑ゆく先義秀ゆ仕官を寿ぬ義邦
高利光仲ゆ盤居免許のよゆを祝ゆゆ又光仲ふ對ひゆ〳〵此度某當所ふ

まつるを誠にも知せまゐらせばさぞ訝しく思れん先何まうさばよかるべき月の阮難に按技蒙二郎が霊魂の賈にありて捕らるを我脱けおとり姫うへに倶し伊豆を志て走る折から彼おん頭髪を包せ給ひし祇物ハ芒六ざるもの奪略りくるを怒地虚空に吹升されく往方もあらざりしその霄再度北大奇事わく吉凶料ともかくりしふこれもまゐらせ怪しく剪せ給ひし姫うへの御髪ハその夜次の夜と夜毎々々に延ること或ハ四五寸七八寸既やうく愛玉なる藍玉院へ著あ日ハ御髪を下ゆ弥倍くに地を引ゆまでにありしうあを未曾有の珍重なれば某諫まりて祝髪得度のまよ及ばも舊の侭あくをりませしに昨夕ゆりをく按技蒙二郎が尋来て夏田殿吉見佐味の殿ら明後日ハ赦免の慶びあるんとく鎌倉へ赴発遅々其後悔あるべしと報るとゆへば夢覚り天明く後にこのすを姫うへに告まゐらせば姫うへ驚き且

訝しくまうさが昨霄ハ夢もをかしの夢と一点違ハをあを正夢である べきにとく鎌倉へ赴発く絆の虚実をあらせよかと宣ひを憑しくて彼院なる女僧達ハ姫うへを委任つく獨濱邊に赴発く便船を索る程に石積い船の鎌倉へとて纜を繹くと皆えーふべ便求めて港成も下田の浦を発出せしかけふ暁のすがりーに折から順風ありければ三十餘里の海上を只一日に泉著く豆菩談を拐ゆくに主君并に殿ばらの恩免の沙汰夢想に違ふを朝夷大人の御営へ徴れのひりくるをにに定うにまべく海月の霄ハ心地して勇めば足も進ず隨にこの御館へ推参せーハ黄昏時のすがりに大殿義憲若殿常盛を見参して由を述ーに大慶の宣ふ義秀ハ夏田吉見佐味の人々と國坐して如此くの座敷にをり今酒醼の最中かーんにとく彼処へ赴発れとて童色装を隷られりかくこの次の間まで来る程に諸大人の物くくひのと蕭やうるぶもー

○ひとたび言果て後ふと見参ふ入らもと云ふく禁内の童を退けて ひとり建屏の
蔭に坐を占てやうぞ時を移も程ふ曩は主君の霊夢の事併ふ守戸浦太郎
ふが素生も又その心操も勝腦かるべ咲きそうり又只渠ふのうへのこと主君の
後悔弓箭のうちん髻を剪あふ折ふ至るいふく駭嘆禁めもらんとく
立あるもふ及ぶべくもあらざれば流れ曾を推居く猶も彼首ふゆしふ感の
頭髻を剪めひ〜ふ別ふ賢慮のあるまあく只一ふ姫うへふ贈らもあふ故
のこと〜ふを洩ふ〜ありもで先く安心今ふかうとうふをり朝夷大人の云云と
守戸浦太郎ふふあらぬさて小三郎共侶ふ姫うへのあん為ふ愛玉へとて起
行の准備を急がせあふはん姫うへの無為御髪のうも今この折ふ告ふ
さもふ怠慢の罪免れがたしと思ば声をあり立く漫ふ呼禁めゆひ咲ふ曩ふ
桜枝蒙二郎ふが自殺の折の為体いかるよりふ如此々々と介後渠ふが霊魂

顕れ橋間苫六等を撃走らしふ光景ふ箇様々々と具ふ報て又ふ
咲くが如ふ浦太郎守戸も劣らぬ孝友節義ふ〜ぬ〜ふの共ふ只恥ふくを
縛の初ふ某慮ひ足らぬてあん消息の究とありしふ大ふ〜ふ怒りありふ
あれども漸くふ尼釋け禍退けくかるる図坐の席未ふ乱り合せ一期の談
喻るふ物も咲ふ〜ふ併朝夷奴〜御橋梓の餘光あるべし寔ふ愛とし愛
たしと壽ふ勇む主従の再會ふ現頼しく耳新ある珍説家信ふ光仲頭を
傾けく感ずく只顧嘆賞も況く席ふ在りと有る友人主従推併て誰ら感
嘆せざるべふ物ふ動せぬ義秀さへふ咲片向く悦ふ堪ぬかの忍ひより産ふ
易〜とふ鄙語も似るかふ奇しくと稱へりそが中ふ光仲ふ又ふるを額ふ
加く肩より息を吻ふ忠臣烈女の霊あるよりふ和漢ふ先蹤多うれど
蒙二郎桜枝が霊魂捕らを矢庭ふ撃退けて又夢ふ入り頭髻を掻け且見

明の建文の○とて燕王逆○謀ありみな○ひろ誓て○まで髯延て三尺あまりこの奇瑞○らんとがれは果してその髯の延しを一夕に○しく長サ三尺に及びしとぞこれらの事ハ天朝の建仁より二百余年後のことなれど光仲の八あらだしてあふれしに由なきことを恨ることなし

姫の宛屈のうちに許さるゝちふ怪しかな姫が剪たる髻の三四宿の程にふたゝび舊のごとく延たるハ鬼神もよくしがたき事へ現未曽有の奇特へ唐山にハ元祐年に壽星降まて道士となり酒を喫を日に一石その頭の神たるてし一宿に長三尺に及びしとぞ世にいふ福禄壽星これなれどもそれ人倫の亂なる星の精の所為なれば且見が例に援くべくもあらねど。なの貞女の冤を憐む神明仏陀の冥助なる欲然らずハ三位入道頼政已下父祖の神霊の祝髪を禁なるらんをしらんと知らずして光仲ハ頭髻を剪て嫌忌を避しも料なる妻を証なりける悪報といふべきものを損益得失宴にそのあるまで至るまで恣の似くなるを知るに足れかくても剪たるが頭髻ハ且見姫に示して淺藍玉院に相瘞て髻塚とも呼做ずべ自他勸懲の端となるらん是光仲が願ひし高吉ハ守戸浦太郎と舟行を伊豆へ赴かぬくこれらの事を且見に報よ守直ハ留まて畳ハ吾儕と共侶に

太田の荘へ立ちよりて兵火に失たる家のうちその工作をいそぐべし土木の功の終りなば。且見姫を迎入れてかれハ諸國を遊歴して廣綱朝臣の在処を索ん今更夫婦再會の縁云云と世に知られなバ亦彼人に忌るべしと示まで義秀うち笑てその讒誠に肝要え灵夢の事も且見姫の黒髪の猛に延たる奇に誇りて口走らバ。世を禍を招くに厭し秘なくとるを執く諭せバ衆皆有理と応て斉一口を藉てけるかくて守直高吉ハ自他主従の恙なきこの再會を送に祝して別後の情を述る程にその言果て義邦ハ後方に施りし武詮と昌之を見たりて四郎太郎五こなたへ進めといはれて義秀から打對ひて朝夷ぬし某今畳土産に足下に送れる物をば見そへこの武詮昌之ハ信夫荘司の舊臣たりつぎ譜第なら時めし八足下も知りてそのせるが如し介なる某編にある寒郷の領主となりても家隷すくなく扶持せんするハ身におりて相応しからぬそれも亦彼らそだの疑ひを惹端なりなんかられバさずが身は

従者のハ廣光と継忠と両老黨にて事定れ里願くハこの杜彼ホを足下ホ附属せさせまく欲をさせる要ゆへ立まとも駑馬ゆへ優もをとあらん四郎太郎五この意をゑ。ゆるくみつぐも請ませまといわれて齊一額をつき御誕辰り給ふ某ホハ敗軍の残兵でありしを是義ゆへ多田殿ホ従者て城を援ひ賊を屠り朝夷大人の庇ホ立てハ父兄の讐の首を獲てりかれバこの両君ハその恩義主君ゆ等し。何ホ仕まるとも合體同志の殿むるれバ進退ハ時宜ホ君が随意なるべきもの歟某ホ今よりして朝夷大人ホ仕へまつりて犬馬の勇を盡しかバ君の為身の為ゆ報恩のよりがあり幸ひホそをいへといふホ義邦頷せて彼者共も右の如しなりで許容を祈るのをとこのあバ義秀微咲て城戸ハ頗智君あり水草ハ亦勇士ゆ莊園一ケ所ゆもくるゝ某ホ使れてハ久後このかげありえと契るまホ在るも彼処ホ在るも有用の所あ借ゆせん借れゆもべしと中かれバ其意ホ任せて預るべしといふホ歡ぶ主従の商量早ホ整ひぬ當下義秀ハ又守直ホうち對ひて隼人ハこの守戸を知るや渠ハ六浦のほとりなる郷士某甲が女児ゆて遠夫浦平が妻の為ゆハ妹なるべく孤となりしをあホ仕へて二十餘年齢四十ホ及ぶまでなほ處女なと人ハいふ之和殿ハ内儀のなきより年来を歴きりと咄けバかれこの守戸城嫁ぬせん後妻とせて共侶ホ且見姫の護せまれバ是両全の謀恩義さ二ッ入まぬよしあらんといふホ光仲義邦もこの議定ホまうすべし現相應しき夫婦あさらと、いひつゝそく守直ハ驚きて只ひたけもあき某齢半百ホ近し况て主従奔走して安からぬ折ホ老婆三昧何ホせんての議なうまへ免させと推辞バ守戸も頗ゆ赧めてく夫ホ添まく識を難んより生涯奉公せべきなれと答へ况めて辞むのをあ調もさま主よらんと呟かるで立んとせしを光仲急ホ呼禁めて局よさのそれが遠へふべき朝夷ぬかのこれ彼ホ媒妁せんと申えてる事の情を精もるホ身後までの意ある援拄

なりかゝる大功を賞まうすに由もなければその叔母に今この報ひあるなん守直ハ故三位
頼政卿の勇臣なりし井隼太の後なれば良人と頼むに不足ハあらじされバとて婿
娵を只今せよとといふにハあらず且見が太田へ帰りて後吉日を擇むべし隼人も亦
よくこの意を得よ推辞ハえうなきぞとあるべしと諭せバ二人ハ問とぞなりに又いなみもあ
らかんなり且して義邦ハ廣光を見かへりていふやう汝ハ近日より石戸に遍ん汝ハ越路に赴きて
判五一三鞆繪の尼に営中の沙汰を報く浅良井と小三二をいそぎて彼地より石戸へ来まほしと
いはれて廣光頭を傾け御諚でハ候へども今やがて食邑に就きて標吉郎のまかりて
其様ハまうさバいよいよ不便に見えんといふを義邦推し入れて否そのみぎハ障なし
継忠のみで物足らずハ朝夷郎に武詮と昌之を借るも易かりその餘の雑人奴隷
なれど荏柄生に借用せよいくばくもぞあるべし彼稲向ハ恩人で且鞆絵の尼も彼処に
ありかし人倫に告遣ずして事あるをりに戴きし備足をえうでぞ今事なければ香を

しも焼ずと見る世話に似て誰か浮薄とせざるべけんや退きて準備をせばやと
辞せしく諭し折から隅亮越まりも咳なく忽地進み入るあり是則常盛
なり義邦光仲にまうし對ひて義秀東道を枉れバ数刻の闌席罪多かり父
義盛も甲夜の程見参に入るべかりしを老人の懶きに不敬を免しあへりしさせる
営侍なれども加る閑居ハまづくぞかし暁までも相譚ひあへといはれて皆進み
向ひて大かたならぬ饗饌の歓びをかん述まうる言果て常盛ハ又義秀に對ひて
いふやう三郎家尊の仰ありその身武功あるにより鎌倉殿の御家臣に召加へぞあと
いへども未だ父兄に寓居して荘園一所も賜らざりければ今より何をもて士を養ひ
馬を飼ふべく君のかん大事に備ふべきや相模國三浦郡矢部の荘ハ故右京[illegible]
かん将に義盛が馬の飼料にとて御加恩の別荘なりこれを汝に譲るべしこの義を
君に請まうさんに障もあるべからずされバ先づその意を得させよと傳へまかしと

主人客に謝して退くを俗に中座といふ　昔戰場の酒盛中酒を作る中の意なるべし

宣ひたるに義秀謹て言葉もれば義邦主従光仲にも共侶にその歡びを述べ義秀ハ只苦笑して諸君子さのみ祝ひ給ふ君に往べく君に逆らひ難し親に逆らひ難しとも賞罰正しく人を用る世とぞ姑く中座を免れ給へ父の武勇に赴くこの歡びをまゐらせ守戸が暇も乞ひ弟ん下河邊が後者ハ獸六郎ら

ところ奴隷をまゐらせべし浦太郎も退く笠草鞋の準備をせ給へ守戸ハ後に跟て来よ。

ことのひろけく遠しげに身を起せ守戸ハ後方に後に立て後堂へとて退く程に浦太郎ハ下河邊高吉と共に人々に別を告て立まくれば廣光も獸六郎に弟ん三人齊一身に起て。緣頰より退けるこれ

より後常盛ハ義秀に立代りて姑く衆客を管待を程に二郎義氏四郎義直五郎義重六郎義信七郎秀盛八郎義國に弟の肥兄弟もかくに兄常盛と共に爵を勸る

垣山四鳥の別離に似る義邦も光仲もかくる囲坐ハ異日復獲たくかんと胃に。

ひおもひ清談夜話に影も短け水成月の晦に近け玉兎盈れば鶴に聚雲のもくもかへるも別路の天中も名殘惜まるく檐端の松に風暢に袂涼け後夜の鐘八ツ狹七ツ狹なる事ハ交りたくく武士の時を沒るの哀れ。

後輯第五十八

天姒女の柱乞
勇敢人の貨獵

却説夏田藏人光仲入道扰中齋ハ次の日義秀に辞別れ初る間中隼人を

ゐく武藏の太田へ赴くに義秀則西三名の雜色奴隷を從て彼主從の資に

もろこの日亦下河邊に三郎高吉ハ守戸浦太郎共侶に義秀より隷られる。

後者ゐく首途して伊豆を投てぞ行るく程に佐味高利ハ光仲を

目送り果て別れて宿所へ還りて江三三廣光ハ越の岩神へ赴くとく准備

とりくりけるを義秀急ぶ止め禁めく且義邦を諫ていはく岩神へよせを報ゐいま今さら火急の要支ふあらば只速ふせまほしい和君が石戸の入部しこの地の繁華を愛惜して又後ふ日をちらぶ再不測の禍あんかこれも亦知るべからざるかれば三二標吉ふをおくもやく彼地へ入れかへられも武詮昌之ふを遣して送らせんと云へども嚮ふ和君の遠慮の如く隨從の家臣多ければ寔ふ嫌忌の端あるなり

あらく腰越獄六をめて彼地まで和君を送らせ更ふ亦石戸より越中へ遣さん三二も亦渠ふおとらく此度入部の俱をすく石戸より又越路ふ遣はされ一事両用と枉さこの議ふ從ひぬへといふふ義邦沈吟ていはく遜その理あり敷のまゐくせばくんやとまもかくふも計せぬへと答る舞も詫らぬ折ふ平太が莊柄の宿所より義邦の迎とらく從者駿第つるよ童扈從の告るふなん義邦い遽しく義秀ふ別を告ふくそぐ俱出くやく程ふ廣光と嗣忠い主の左右ふ

從ひつ又武詮と昌之い殘る暑の甲門前ふを送りるに程ふ義邦い莊柄の宿所ふ立ちくらく先亂長ふ對面つ崖姫ふ云云と當中ふその首尾を告て且光神夫婦のゆ文藁二郎按杖ゆ守戸浦太郎がるさへふ送ふく長ゆ示されを崖姫いはりくとやくふ悲しく辛ゆされ人の歎ゆを弟まで知る涙の雨の漏る袖を顔ふ翳して泣ゆふ亦てのよい亂長も彼然を退て後ゆ枕ゆらるの妻れい愁然として嗟嘆ふ堪ず直ちゆ世を憤る恨ふ色ふ顕れそう且くして義邦い貌を歎めく恭しく亂長ふうも對ひくこの月ろ淺ゆ殆ゆ待の歡びを具ふ述くそいふあう某今い當地ふ要ゆ武藏へ赴くべしその故い如此ゆと義秀の意見の趣みゆ殆ゆ亂長頻りふ領ゆくその議寔ふ理りし某宜くゆのせんとて送ふ示し今つその日を光仲夫婦のゆへと又彼按杖藁二郎ふ身後の忠義を嘆賞しく終日かくひ

くーけりかくてその詰旦亂長ハ義邦を向注所へむく多りそ義邦石戸へ入
部のすを執権評定衆ホ告ークベ廣元善信ともやくそのを人ハ既ホ件の人ホ
身の暇をゆひ折彼地へも下知せ玉ふ彼処ホ安達が一族石戸左衛門の住
捨る古館のあるあれバをそ俗ホあるめく幾足の寛急ハその外の勝ホ
なるべーとそ御教書を遣ハ与されり。これホより義邦ハ日ホ廣領所ホ就んとそ
行装をいそぐ程ホ鞆速ホ整ひぬされバ又亂長も義ホ疎ホ武士ホ
為ホ費を厭ハとく廣光嗣忠ホ外ホ自分の雑色奴隷をめそ駅供ホ
立ける既ホ夜ハとトめくく首途の日ホ当りークベ義秀ハその暁ホ城戸四郎
武詮水草太郎五昌之腰越獣六郎ホをるく走り来る豫て約束のするあれバ
獣六郎ハ吉見夫婦を石戸の荘ホ送りく後ホ如の地ホ越中ホ岩神へ赴け
とそ鞆繪の尼と判五ホホ贈る書状を遣ハ与てり既ホて義邦夫婦ハ亂長

義秀ホ辞ー別ひそ立出ぬる程ホ佐味竺内高利も後れ走ホ走り
ホく共ホ餘波を惜こけりそ中ホ武詮と昌之ハ斉一進ぬそ切ク相模と武蔵ホ州
堺近もとく頻りホ供を望ミーもとも義邦かく禁めそ許さ左ホ就ホ
哀歓定めくそ世を泣る郷ホ武蔵野ホ飾る錦ホ戴ホ初秋ホ
衆人の袖ハ露けそ朝出立崔姫ハ轎子ホ乗るひとハ涙ホ別
路ホ暮ク假屋の宿ホ八声の鶏も鐘の音も今朝いくわー身ハ罪なくそ
配流人の心地をとより果て立ひるを諫め奨を壮士の位ハ哭くホ弥三郎ー
水雲萬里田別の哀ひ餘りく辞ホく立ひ左ホ友ホ駒の足驟ホ任
しても心ハ送る胸の月真如の影を仰ぐ悔ーなくべーそ人の明ホ主従聚散
離合逝く返らぬ別れ六後ホそ哀ひ合ーける世れハ又義秀ハ光仲三郎ホ別れ
ようー鬱々とーて果ーなそ扨ホ拝ホ宮中へ出仕ーて逐侍ホ

ぶりを頼家卿ハ遊興ニ紛れて知ることなかりしを絳ゆう多くかやうの事ハ義秀呼
とて召さるゝ程ニまもなく前ニあり一ハ海に近く待らせて物がたりせしに
語次ニ宣ふ人ハ東西南北到らぬ限なく諸國を遊歴せしかば
逆旅の苦楽ハ姑く措く深山大澤人ハ見ぬ境域ハ邊鄙村落ハ鬼魅罔両のあ
らぬ怪物ニ撞見することを退治せしハ如何ぞ
備へあと亦他支も多く問あべし近習の輩うも合笑く仰寛ニ理りと毒蛇猛獣
夜叉天狗通力不測の変化とも恐ぶ怕るに人ハ怪を弊を捕ハ
本事ハ有て想像れば遊歴中の怪談いくばくもあらんとぞ
右ぶりのそのうせども義秀これまでかんつゝ且てまうもう御詞でれへ
ども妖怪変化いとのうあれば心より我せのまゝ多くハ狐狸の所為ゆえ必らしげ
ぶりの欲某諸國を巡りて折妖怪ハ撞見せしかれば思鬼夜

又の類怪むべく怕るべく画ニ如ぶ妖怪ハ世ニあるまく出んといふせも果ば
頼家卿呵々と笑せ給ひく義秀汝武勇を特ぶ彼阮籍が無鬼論ニ倣と
欲せる狄恵鬼羅刹ハまぶ目ニふれぬ世ニこれなしこも
べ〳〵ぶ曩ニふれ和田平太亂長ものく伊東崎なる山の洞の底を究めよとく遣
せしに亂長ものゝ数十里坂東道ハ八町一ハ里ハ大蛇を斬て帰る又仁田四郎
忠常をめて富士の人坑を捜せしに忠常従者と共ニ六人多く炬を秉て洞ニ
入り進むゆくと迫ハ一ぶ里ばかりを覓ぶ時ニ蝙蝠群飛て面を撲
て頻りあり既ハ一て前面ニ河あり高く漲りて渡るべくもあらざりしを
従者ニが瀬踏する程ニ四人ハ溺れて死ニ乍ら浩処ニ前途のかゝるに関めぶ
火光と共ニ残る一箇の従者も忽地仆れて息絶て忠常こもニ躊躇て
前面を仆と見るに禅娟る一箇の神女彼首の水際ニ立在て雪あり素ぶ

頼家
月夜よ
嫦娥と
めぐり
より家

てを抗く勇士速に帰去れ臭骸凡夫の汝曹足踏入る所にあらず遅々せば汝の命を損さんとく還らぎやと嘗るその辞いまぐ訖らぎ逆浪倏忽漲立て是首の岸に来んとす勢ひ當たるべからざれば忠常は身に帯る短刀を抜き取あげく河へ水入と投入れて。馳く踵を旋らしく辛して舊の路を辿るも恙なく洞より出ぬ既にして往還の時刻一晝夜を歴たりとぞ。

○忠常をもて證とせしに。

あり正しく証拠ありの由日甲夜の程なり紀連日の酒宴に疲倦し宿酒を醒さんとく起て高楼に登りて欄干に身を倚うけく吹入る風を待程に天中に一朶の雲もなく月明に星稀なく狂鴉の杳を迎る声のみ遥に聞えて比は六月中澣の晝の燄照の天中に送りく天河原も涸ぬけん中伏はいまだ過られども秋氣暢ぶ松に声あり時に西南のうに當たりく鬚髯る五色の雲天引降を足る程に天文忽地影向して地を離ること三丈許これに向ひて間近く立る。

綾羅の袂は四下に耀き蘭麝の薫はいとも芳しく況く天艶の容は亦人間にありとしもあらぬ花をもく驚せん花も及ぬ程あり月をもく比んに月もなほ劣るに似たり。左右に両箇の女の童ぐ玉兎蟾蜍の翳を執りくるあも亦人の亂ねば玉面花容といへば紀のみ登時天女の萬の初音にも優に声立て云く。

月宮殿の嬪妃なり此度天帝救誕あり紫微月宮の両殿を造更せ給ふ。

黄金の柱一本足らぬ。頼家に徴やとて妾を降しあり。

かくのごとくいぶかるを。

列宿武曲星の再誕犯せる科のあるあり遂に人間に追降されて胎を母胞に裏まり右幕府の家子と生れて既に二代の將軍たり今天下無事と富を

四海を保つらんやも憂苦煩悩をとゞめ天堂豈復らんや今もろ〳〵の天帝は
あの勅命を幸ひ件の柱をさく進せくかの怨を償ひあぐあの世中とて百
年の遐寿を百ねく楽を竭かぎ脱履の侯天上の列宿と復かうんと群仙の
みな羨む所只この功徳に依るべきのことゆえに驚くこゞ前身東報さてそと
やへども輙に行ひあざれば沈吟ドる頭を擡くゆひ仰く王帝のおさせあひ
ぬる黄金の柱の脩短いかをもるめを欲しめぞ教えゆと問を天女はまこと
長さハ二丈五尺なるべく周さもこれに称べしと示ほゆ心の當惑黄金を素より
國の至宝なる威勢をめくゆとも沙る柱のつゆて輙く造り出さるべき財用足らぬ
せん術やと推辞ハ天女の怒を含く心蓬し賴家卿日本摠追補使とと四海の
富ハその身に聚へりよりも宝庫ゑ物足らぬとも民に仰せて借りあぐ件の柱を
幾本とも日ならで造り出さるべ飛騨の深山に拙木樵る樵檜より易かるべし。

惑ひをとりて難渋せ〳〵れば天帝へ違敕の罪冥罰顧ゆるのをかて未来に
劫六畜ともの身をかさんとそきよみぐく深金をへり。と諭せに従て固辞ゆ由ず
逆天の罰恐れても惶るに餘りあり。
何の日ぞれの方へ出べきと問へば天女ハ領ぎく約まるとて今ありて七日の間柱を
作るく彼処の松に荷せゆへ奏ハけゆ七日に當るその夜三通の比めくゆ来さて
ゆ升りて天帝へ申ん身の功徳を奏せゆ然して漫に天意を漏るゆ労しゆ作り
崇あるん努秘めゆと期を推して天女ハ雲に立紛れつ彼女の黄兵倡に見
ありあり當下れ忙然と其方の空を目送るのゆ夢とあへい夢にあらぬ想と
ゆ絶く延ゆ一枝ゆ比べなあざれば猛に事に假托く黄金を裏ん柱を造る
六日ゆ工卒りかくて約束の宵にあり一ゆ作り磨ぎ黄金の柱
彼高楼の下なる庭の松に荷けさせく近習の輩を遠離つれ只ゆ庭に

出で、香を焼き心を澄し要いく天を俟程に果して天女影向と彼柱立つ、歓びの声音も妙に賞賛し将軍今この功徳あり綸天帝に奏し寿福八百ひの隨喜べく海内いよく泰平ならん恩恵を政支に費せとかく恩賜乱楽こと極めへと慰めくをもて招けば奇なる形件の柱それの川から松の梢を離れ空に登ると程に左右に従ふ女の童子が本末もとう受とあくそぶ侍有ふ者のそれば累り包む白雲に體いつくんで西南のくふ靡かく失せけるこの神祇露せられども予が目撃せし所中てく誰とそ知らぬものもかし抑神霊奇異のものもかり平記證あらんやさぞむ汝ハ江湖上に神霊もかく妖怪もかくとい欲いつるぞいと弊せるとく詰りゆへ義秀ハ呆れ果て忽ち天妃息を吹き竹取字津保の物の本捜神異死の小説に豫ても見たることかく今の世中て出る奇験ハ沿くそれ新奇とまたべ。そいつ氏のこなりけと問つ

傍に見えれい近習の輩僂へく遠くまいぐ。いとの果く又其日に及ぶのこと不ふ義秀領ぜく貌を歛め恭しく御座に對ひて額を地基間迺寡聞に端発世ハ真の妖怪なくとまを詢させ天女の一奇異耳新しを疑ひ不ふに

あるれとも心ふそあるすあるとまるぬ不忠なべ彼唐山なる道家の書に紫微玉城の説まる八人を魅ん寓言あり天ハ虚中て空なれ陽徳ふく形状なし陰ハ神の像かりも終ハ在ると不ふ如しとをいふく天上ハ亦人間に異なる宮殿樓閣あるべ乱や誣く宮殿あり此の世ふ巧頃刻を修復ととそ工作を奥さんといふくいあるべ(且列仙天女のこもの有無推て知るべ乱のこかくのこまるこ八我意ふ慕りく至尊と思ハ天下敬の罪を釀ふ例てやも惶しまりて二回なり身の服を改くハ天女の往方を渉獵ハ乱やく真偽を其処ふ糺べ見其ふ願ふとい、せ果ハ頼家卿

色地黛と赤らめくやされ義秀汝らを侮りて机貉ふ魅うらみ虚ばかりの
ごとき汝が子孫を殺すべし。汝が才長ぜる河源を究めく織女ふ造けん彼張
騫ふ倣やとも今更天文の往方を索ねく真偽を知らを願ふと酔狂人ふ異
ならず宜しく沙汰の限りこそあれども己が身の願いを許さびいこふ惑へる狂惑ざり
し狂ゆるべ見ること天文の有無を諦して懲を申しかーよりて翌ゝ十日を限りて
汝ふ身の暇を取らせん期あらば天ふ升りて正北徴を取て来よ空ーしく立
ちくらばその度ハ決して免さどとゝく退りて升天の准備をせとと敦圉ゆ氣色
平ならぬふ近臣ものくふ汗握りくすかれをまうちより求めて自殺を招ふ
廣ー無益の論議ふ物を推せ博士ごろのうこそさとぬのらるうりもも
かりやこれども義秀ハ些も驚ぐ言受して営中を退出つ躯て宿所ふ還りー
かどもふ又ふよりあれば父ふも兄ふも定ふ告げ某けふ営中へ伺候してひーふ

伊豆山の裾野ふ出く追鳥狩をせとある白命を稟うり紀よく走りて資力ふ
駿兵十名ばかり借りて更野猪麋鹿ふ向ひ人ふ義盛
ばかりて十人ばかりふ足ーー。五六人倍まべーとそ家録召く立地ふ辯云云と分れば
義秀ハ退紀く城戸四郎武詮と水草太郎五昌之を泛とり近く召ひーてけ人
営中ゆくあーー趣天女影向の一ー條を具紀示ーく又いふうれそふまうを必妖
術ある山伏ふ盗賊の所行ふんず疑ひふーよりて如此々と請おらーつ
されば郊外の山野を渉獵く彼癖者の在処を索ば臆度の外を出して自ふ
嘩ーて生拘るべしかーそその方位を攻ふ天女の進退一度ふも西南のこを投て
裾去いたりとぞ思れば足拘狀貌姉峯ふ来て天城の山中ふんれ先
天城のこをたづねて遭ぎハ足拘を渉獵るべー汝達よくこのあるを行く勿ふ
遭ば死力を盡せよとれども癖者こぞ入ふまべハ秘よ外ふ洩らーそと示

せば武詮昌之はあらず汲果てゞ退くるかゝてその日八果敢く暮てゝ曉くゝ
ありゝゝゝ義秀は獵教来して頭ふ一蓋の綾藺笠を戴き背ふ三十四挿こる獵
笠前を皆高ふ員ゆて腰ふ倶利迦羅の短刀と半弓を左右ふ横佩ふ鐵撮
棒を突立くるゝと馬ふ乗らぶりゝゝを左右ふ従ふ両箇の郎黨武詮と昌之ま
腕甲脚帯ふ身を固めく各器械を引提こりこの他士六名の騎兵五人の奴隷
主従總くて四人その夜は貌姑峰の山中ふ長ゞ宿所ふ曉を狩ゝこの地方は
浸やゝく遠くゝより渉獵んとく又曉くゝふ立出く只管路をいそぐ程ふ茅
三日の午時ふ天城の山ふ入ると十五六里　坂東道六町一十里　ゆゝ及びる抑伊豆州那
賀郡天城山とゆゝは麓より麓まゝ行程大約三十六里　坂東道七三十六町一百三十
人烟絶くあるとく羊腸こる山岳苔滑ふ路細く一夫関を成ると雖千軍
萬馬も進ぐゝとゝ蜀の桟道ふ似こるべし。青葱こる常盤木は弥ゝ
枝を重ねく瓢形の日影も漏さぬ蔓延こる藤葛蘿は岩より岩ふ蔓縁て
造化の網を張れるゞ如く向上れば十丈の青壁刀もく削るかと怪あれ直下ば
百尋の碧潭鑒めて穿てるかと驚こる掛上ふ聚ふ山蛭は旅客の足音を聞て
落来ゝて撥拂へども飽ざれば蛭ば叢蔭ふ臥も牡鹿は炭焼く煙ふ驚起く
人逐されども走らぬが己ど鳥は樹隠れく高音ふ頭れ雲は峯ふ帯ゝゝく
風の音ふ解る山静ゝて太古ふ似こり日長ゝて少年ふ異ゝゝ誰こる淺水ふ
盃を濯ぐく流るゝをあはれこる晴こる遊仙の嵐を訪ふく還ることを忘れこる
奇巖怪石攀れども陟ぐゝく鳥路熊径進めども到り易ゝゝ寔ふ
是塵外の住境ふ遊ふ今半日の逸栖は彼七泰の氏こりゝ漢とあり
晉と遷りゝその世をあはれふ似こり程ふ義秀は主従草を
折布く腰兵粮をうちもりて食果く立んとすると忽地南の空を隔く

鑿の音丁々と谺に響き渡り、義秀耳を欹て武詮あれを聞く歟
昌之いかゞやと問れて弁一小頭を傾け現山樵が抽木伐る斧の音にあらず
石工が石を鑽る鑿の音なるべし
あらじ石にあらじ彼は正しく鑿の音なり衆皆績けと遠足進めく件の音を
聞るに當に深山幽谷なるべし人かと既やうく十町あまり或は菩に攜りて登り
或は岩を傳ひて辛しく近つけば樹枝の間より顧みに眼前の嶮の
ほとりにさもあらぬ穂屋を作りて癖者まへく五六人四下も耀く黄金の柱を
鑿めて剪碎くを鑄ふけく燒爛もとゝ半ば過うるを中に只一人
頭ともたる癖者ありそは義秀が岩神なく鑿漏しる賊の蔵黨鐵眉
矢藤五重連こ原来彼奴が幻術もて天女とんせく上を欺き騙暑りたる
黄金の柱を燒るもなく售んとゝ謀りかゝるべしと豫てより

合笑く後方に立てる武詮と昌之を招呼せく雖如此と其けば二人を
弁一あるゝ又駁兵に武詮ハそが中に十人を從へく路あれ往を
辿りくも穂屋の背に遶り彼昔はあるものかゝるまう當下義秀ハ
立まつる鐵撮棒を昌之に遞与あそ誅し合せしるあれが昌之もく進まりて
そが彼取て突立に渠も力の壯佞あるゝ腕に稱べくもあらねば只曳揚りて
駁兵に先に立て樹間より顕れ出る程もあらじ武詮も亦穂屋の蔭より
駁兵を進め走せく雙方齊一喊と揚る声に駭く山賊ハ吐嗟とぞ
見えれば近つ紀る太郎五昌之笠ふりくして面をうせじ鐵撮棒を
もて半て四下に響く声高くうれ賊鐵眉重連景義に岩神なく
命を貸ることの義秀を忘れハせ下矢羅の中にありゝ汝ら首ハ汝が物にあら
ずとあくそ邪術をもて上を瞞しなり幾十貫の黄金の柱を騙暑りあらに

駆れく鞠ふひく焼るも竊ふ售んと伎倆るよりは天眼通もてこれをく
知れりよりて追捕の仰を稟くから多勢をもて捕籠されば左慈張角が
術ありとも一歩も道を路いなく とくもを東ひく郷の索を受まと呼れば武詮も
亦声高く立く陸奥の戦ひふさ涼ものありともいれる城戸四郎武詮この隊ふ
在り其処ふ退ぞと罵りく驀地ふ嘯く蒐れば いよく騰ぐ麓の山賊
脱れくとやあひん巨刀あふく引抜ぞく刃ぞ立てと斫拂ぞをかくもと
武詮昌之駄兵を進めく些も擬議せず或ハ組伏せ衝倒し一箇も漏ら
さぞ縛ぞと索をけそぞ牽立るその間ふ昌之ハ武詮と共侶ふ重連員ぞと
左右より撃漏さじとて進ぞりぞ程ふ重連ハ愛時ぞ下の山賊を頻りふ
罵り励して防ぞ戦んとせ一甲斐もなく皆彼此ぞく生捕られ残ぞその身
一箇ふ有り如況く水草昌之を朝夷と云くけるふ武詮と左右より間

近くぞを尻目ふけく口ふ秘文を唱る程ふ走りかゝる昌之武詮矢声を
合て丁と撃ぞ寇ハ剪れく重連ハ足下ぞ立升る雲ふ閃りとうふ来りて
脱れ去らんとぞ処ぞ半反ぞうふく形る樹蔭ふ張ふ義秀が透さず深と
裂つ箭ふ重連ハ乳の下より背へ箆深ふ射串れく忽地撞く滾落る武詮
昌之ぞ累りく緊しく索ぞけそけり登時義秀ハ程ふ石ふ尻ぞけり
先重連を牽居ぞ来ぞこれを責河ふ臨ふ炎所の深ふ弱りぞの
いべくもあらざれば又彼ふ平の山賊ふもべく五名を推並べく鞭懲させく責
問へば苦痛ふ堪ぞ首伏ぞ某ふハこの山中ふ年来住涼めども有ふ
鐵眉重連ハ曩ふ越の岩神より遠く脱れて只ぞとうこの山を踰んとせ折ふ
相識ざれば剥器んとて戦ひふ勝ぞ絶くありけるかりしハ重連ハその出
処ぞ術あるかを云云と説示ぞとうふ某ふハ渠を頭と推仰ぎく徳屋ぞ

天城山
義秀欽眉
矢藤五を
生拘る

矢藤五

譲のくゆひ水火の日重連又いの雪今こゝ腰おい物もかく各位も赤銭あづかて
月日を送るとも。あゝ沈みもあべくこれ幸ひふ奇術あり今宵鎌倉ふ赴く
箇様々々ふ行ゝ夥の黄金を獲つべ紀と酒煖めて如ゝ力を等ねとの欲と
云へば掻消ものとく體のんえびあり〜ゝ某ふいその幻術ふ心服と疑ゝ
憑〜とふ程ふその夜ふ空〜く如り玉つ。緯を成ると歓び告て七日ゝりを
過つゝめゝび雲ふらも乗て鎌倉へと蜚去り〜ゝ果てその暁々さふいと大れある
黄金の柱を空中ふ立ゝ滾隊半〜てその身も雲を下立ゝ緯云云鎌倉殿を騙
課せ〜為体その宵の首尾を報ゝあゝ某ふ呆ゝあゝ歓びてうもも
措ゝ。ゝ柱を售んと請ふ重連頭をうも掉ゝて早ゝそこの仮售と
ゝ緯立地ふ裳覚れくその祟速ゝべ〜打砕て焼爛して少許て断々ふ
售ゝ買ふゝこれを疑ゝ長くその利を求ゝべきと諭ふ衆皆有理と

応ゝく鞠墜を求ゝふ非ゝもあゝとかれば北條まを赴ゝ玉ゝくゝて
これを得ゝこれらの所為ふ日を費して焼初ゝりゝ日もあゝ猶ゝその訣
だゝもまゝ沈售ゝ搦捕られ紀と哪言が中ゝく陳ゝ義秀ゝて武詮ふ
徳屋を展換ゝ玉ゝ旅等発ゝんと沈ゝ紀ゝの沈藏ゝ術書三巻あり義秀
取て初ゝき見ゝふ紛ゝべくもあゝ陸奥ゝく重連ゝ逐電せ〜時猶取〜
経任ゝ妖書ゝ第一巻ゝ飛行の術第二巻ゝ少禄を発し千曳の石も従その術
第三巻ゝ風を喚び雲霧を起ゝ林を載ゝ皆隠語ゝて速ゝ読易ゝ如めの
紀ゝ義秀ゝよゝも凡ゝも残黨穿鑿のゝ如ゝりゝゝ如ゝ紀ゝ歓ゝ
巻ゝ尽ふ懐ゝ夜ゝ〜その智その勇みの圖ふ習ゝ〜義秀ゝ紀の進止神
出鬼没の良策ゝ紀ゝ武詮昌之ゝく感ゝて左右ゝ〜く進ゝ某ふ不可ふ
ゝ沈ゝ紀ゝ義ゝ紀ゝ越の岩神ゝも重連ゝ幻術ゝ君ゝ紀ゝ其の様紀

當時と変ずるに故間も遠く渠も要ずも乗さ業ずんとしてるを君之新射で落されいつる所以おんぞんと問へば義秀微笑く虚実を心つぶらしいこの業ひ理りなるべく術者の邪ハ邪正ゆゑ受るの虚なるを恐ずその術ハ応験を徴ず百を徹を箭ゆ幕ハ障れば落るが如し岩神ずくんるを乞盃て重連を敷ずんとせば還て彼奴を走らしむる皇国ハこの理をゆゑそ昌之ハ名を告せて且詐いれる捧をゆるせれい躱れく岩ずるれば重連ハ昌之を義秀と思ひ故ず勢んとなる昌之ホが捧ゆゆも彼身ず當らば脱れ去らんとなる及び渠又外ず敵あるをもらばこの虚ず来ず畏るる義秀が箭ハ不意ず岩神の捧と同ずくばそ敵難ずと射ず捷さしいるゆゆをそと示ばず武詮昌之ハ敵を撫れる如要ずいゆく感服をるる亜竟義秀重連ホを生捕ず又甚麻ゆる詰説ゆるるハ亦復編を續ず解分るをるを知ん

朝夷巡嶋記金傳第六編　巻之五　終

附くのゆゆの書第七編の巻々を繙ずず至らば先天城山の條の送れ必ずるをべく。

然ず大後ホ義秀乃始ずび陸奥へ赴記頼家修善寺の浴室中ず弑せるゆゆまゆ又ゆの朝夷切通の權輿ニ浦の矢部の不動和田合戦の濫觴義盛軍議の特ず力て人の視聽を避んゆず大磯ず長ず妓院ホ親厠朋黨まで同意の武士を聚會て和田酒宴と唱ばゆゆ中一叔建保の和田合戦終ず敗軍ず及べば義秀その後二百餘人と共ず船ず大洋ず泛めく危窮を脱て支ず終るべ。その間義邦夫婦父子主従一期のゆ且見姫主従并ず田鶴媛靭繪の尼判五一三浦太郎ホが事盡んとしくハ又起る嶋めぐりの條ず至て第七編の後ゆゆ八百日ゆく濱の真砂秋又ゆの壷の碑ゆるゆゆをゆたつくしと書肆ハ急げど早ゆゆ書も盡しくく看官後をゆまくほきせどゆゆも早ゆゆとゆの長物語ゆゆゆばせん異日の遠忘ず備んとくゆゆの提要を記ゆゆ。

吉田屋

坊賈の利ニ捷まさる。素よりその所之志ハ猶甚しかれども拙著
常世物語・三國一夜物語の二書のごとき文化丙寅の燬ニ係りて、その剞板一ハ
烏有となり、一ハ過半亡びぬ。けだし一賈豎曩ニ常世物語の足らざるを翻刻
又一夜物語を翻刻せんと嘗る者ありしかれども、校正をこなさざるハ
ならんか。就中常世の一書ハ悠ニ書名を改め更て且出像も假名の書ざるもの
まふせばなるべしかれば、悞字脱文假名違ふなど枚挙ニ遑もあらざるをこれを
知らず今茲相識の一書肆が常世の板を購得うとて校正をこなさんとし及びて
せっかく知りてうち棄てぬかれば件の二書ハ多くハ舊板と違ふところなくニ
面目なくなるべし頃ハ九年前の戯墨なれども今ハ慙愧ニ堪ざるも
ゆゑ孫どコヤが名を賣らんことをこいねがふ。聊そのことを書けるのみ。
丙戌長月朝夷巡嶋記第六編の後ニ贅す。　作者識

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸
府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兒ヲ命セラル故ニ新板
圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論
亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ
就テ御買得アランコヲ　文榮閣主人謹白

製本處
前川源七郎
大坂府下心齋橋筋
北久寶寺町廿九番地